### 恒星掩蔽サーベイで明らかにする太陽系外縁部の描像

**有松亘** (ISAS/JAXA, UoT),和田武彦,猿楽祐樹,臼井文彦 (ISAS/JAXA) 07 10 13 Kiso Schmidt Symposium 2013



trans-Neptunian objects (TNO)



© sci.esa.int

・キロメートルサイズTNOのサイズ分布の解明:

1.カイパーベルトは木星族彗星の起源であることの観測的証明

・彗星核サイズ(1-10km)のTNOはどの程度存在するのか?

・軌道モデル(e.g., Volk & Malhotra 2008)との比較



・サイズ分布の折れ曲がり点からCollisional cascadeのタイ ムスケールやTNOの物性に制約 (e.g., Pan & Sari 2005)

・デブリ円盤生成メカニズムに観測的示唆



★いずれも1-10kmのサイズ情報が重要



# preliminary

・キロメートルサイズTNO:
可視光度は28等以下
➡10mクラス望遠鏡では直接検出不可能

・直接検出で得られているサイズ分布は D~30km程度まで





- HST / Fine Guidance Sensor archive data
  - •Schlichting+ 2009, 2012
  - •2.4m 宇宙望遠鏡, 40Hz 測光
  - •総捜索期間:約14年
  - ・数100mサイズのTNO掩蔽現象候補を複数検出

- Taiwan American Occultation Survey(TAOS)
  - •Bianco+ 2010, Zhang+ 2013
  - ・口径50cm望遠鏡4台で、5Hzで測光
  - ·総捜索期間:約6年
  - ・kmサイズのTNOの掩蔽現象は検出されず
  - ・サイズ分布に制約



**Figure 5.** Photon counts as a function of time of the candidate occultation event observed by FGS3. The red points and error bars are the FGS data points with Poisson error bars, the dashed blue line is the theoretical light curve, and the blue squares correspond to the theoretical light curve template in our detection algorithm integrated over 40 Hz intervals. We note here that the actual noise for this observation is about 8% larger than poison noise, due to additional noise sources such as, for example, dark counts, which contribute about 3–6 counts per PMT in a 40 Hz Interval. The best-fit  $\chi^2$ /dof from our detection algorithm is 27.3/28. The star has an ecliptic latitude of +6°.6 and its angular radius and effective temperature are 0.58 ± 0.06 Fresnel scales and ~5000 K, respectively. The position of the star is R.A. = 64°.74065, decl. = 28°.13064 (J2000), and its estimated *V* magnitude is 13.9. Assuming a circular orbit, the best-fit parameters yield a KBO size of  $r = 530 \pm 70$  m and a distance of  $35 \pm 9$  AU. (A color version of this figure is available in the online journal.)





・継続時間: 0.1-1 秒 (主に地球の公転運動 (~30km/s) に依存)

・Fresnel scale (~1.4km @40AU) に近いサイズ の掩蔽: 回折効果を持った光度曲線

➡~10Hz以上のサンプリング周期で短時間測光 を行えば光度曲線プロファイルを検出可能

・掩蔽による減光率: a=1.5kmのTNOの12等級の
恒星の掩蔽で50%以上

➡そこそこの測光精度で十分に有意な検出が可能



・掩蔽捜索:一度に観測できる恒星の個数が多いほど高 効率

・木曽シュミット/KWFC

・高感度&広視野:一度に大量の恒星の測光が可能

・読み出しにかかる時間: > 30 sec / frame
・1秒以下の周期での露出&読み出しは困難







#### ・流し取りで高時間分解能測光

- ・ 恒星時追尾に対して一定速度で視野を移動
- ・軌跡に沿って測光→光度曲線
- ・露光、読み出し時間よりも早い時間分解能で連続測光が可能

・大気擾乱によるシンチレーションの影響は?
・短時間露出の測光精度に悪影響を与える可能性

★流し取り手法を用いた、短時間恒星測光のシンチレーションの影響調査

・ISAS望遠鏡(D=1.3m)を使用

・シーイング 3.0 arcsec, 雲量3-4





### preliminary

•0.1秒積分での測光値のばらつき: すべてのバンドで~10%以下

・特にR,Iバンドはフラットフィールディングエラーが支配的か

➡シンチレーションによる揺らぎは、TNO掩蔽捜索で要求される値(~10%)に対して十分小さい

・宇宙研望遠鏡の観測データを用いて、光度曲線算出プログラムを作成中

・7-9月期のプロポーザルを提出

・視野内の恒星数を稼ぐため、黄道面と銀河面の交差点
付近の領域を観測

・1フレームの積分時間を60秒に設定:限界等級13.8等
(clear, 5-sigma, 0.1秒ごとの測光)

・一度に~1万個の恒星を測光可能

・50時間の積分時間で先攻研究と比べ約10倍深いサイ ズ分布の制約を得ることが可能

## preliminary

・50時間の積分時間で先攻研究と比べ約10倍の感度でサイズ分布に制約 ➡kmサイズのカイパーベルトの掩蔽現象を史上初めて検出できる可能性



5km以上のサイズを持ったオールト雲天体の個数密度に観測的制約 ・N(r<5km) ~ 10<sup>8</sup> 以上なら、1回/100時間程度の頻度で検出可能 ・継続時間と減光率からKB/Oort天体の切り分け可能か



・キロメートルサイズのTNOによる背景恒星の掩蔽を検出し、カイパーベルト、及びオール と雲の存在量を検証

・0.1-1秒スケールの減光を観測、掩蔽天体のサイズを測定

・KWFC、流し取り手法で50時間積分を行えば、これまでの10倍以上の感度でサイズ分布に 制約

・木星族彗星の起源やTNOの衝突進化に重要な示唆を与えるはず

・オールト雲掩蔽現象の観測可能性